

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 1 日現在

機関番号：33917

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520213

研究課題名（和文） 中世に於ける医事的知識の啓蒙と実践－医事啓蒙書・呪術書を中心に－

研究課題名（英文） General knowledge and practice of medieval medicine: Texts of common medical understanding and of magic

研究代表者

長谷川雅雄（HASEGAWA MASAO）

南山大学・人文学部・教授

研究者番号：70148295

研究成果の概要（和文）：江戸時代以前には、人間の心身の変調の原因に、「虫」が想定されることが多かった。「虫」に関わる多くの資料や事象を検討した上で、その意味について考察し、一書として出版した。鎌倉時代の『医家千字文註』と『医談抄』について、注釈的研究を行った上で、両書の性格のちがいについて明らかにした。また、鎌倉時代の医家の活動を検証し、医事説話集が編まれた理由を考察した。

研究成果の概要（英文）：Before the Edo Period “bugs” (*mushi*) were often assumed to be the cause of a person’s mental and physical troubles. We have investigated a large number of documents and phenomena related to such “bugs” (*mushi*) and have published the results of our study in a volume. We also have made a study with a commentary on the Kamakura-Period texts *Ika senjimonchū* and *Idanshō*. In these studies we have shown the difference in the character of the two texts. Furthermore, we have investigated the activities of Kamakura-Period medical practitioners and studied the reasons why collections of tales concerning medical matters might have been compiled.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,200,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：医事的知識、中世、医事啓蒙書、呪術、宮廷医

## 1. 研究開始当初の背景

中世以前の日本医学については、医学史研究の分野に於いて、富士川游氏『日本医学史』、小曾戸洋氏『中国医学古典と日本』をはじめとする研究の蓄積があり、中国医学書の日本医学書への受容の問題などが論じられて来ている。一方、国文学研究の分野では、医師

が作家・学者を兼ねることが多い近世に於いては医学史と文学の関わりが注目されているものの、中世以前についてはあまり研究が進んでいないのが現状であった。説話研究に於いても、仏教と説話の関わりについての研究は近年盛んであるが、医術と説話の関わりについては未開拓であった。

本研究開始時の代表者であった美濃部は、従来、科学研究費を利用して、『医談抄』を中心とする医事説話についての基礎的研究、「伝屍病」に関わる資料とその言説の分析、人間の心身に変調をもたらす「虫」についての学際的な研究などを行ってきたが、その中で、医事初学者への教育の問題、医師以外の知識層への啓蒙の問題、呪術と医事の関わりなどの新しい問題が浮上してきた。研究会開始時は分担者で、美濃部の死後代表者を引き継いだ長谷川、および分担者の辻本は、美濃部とこれらの研究を共同で行い、問題意識を共有していた。

## 2. 研究の目的

職業的医師に於ける医事的知識だけではなく、医師以外の知識層や、医を学ぼうとする初学者が、どのように医事的知識を与えられ、それをどのように摂取していたかを知ることは、中世人の知的世界の、従来の研究に於ける空白地を埋め、全体像を明らかにする上で非常に重要であろう。また呪術と医術が完全に分化していない時代にあつて、呪術の側、仏教の側で、医事的知識をどのように受容し、利用していたかも重要な課題である。本研究では、これらの課題を明らかにするために、医事説話、医事啓蒙書の発掘と分析、呪術に於ける治病と医事的知識との関係の考察に重点を置き、後述の方法で研究を進めていく。また、医事的認識は古代、中世、近世そして近代初頭の各時代に通底する面を持っている。それゆえ、研究の中心は中世に置くが、中世に限定せず、医事的知識に関わる言説を広く分析の対象とする。

医事に関わる説話と伝説を仮に医事説話と総称するとして、医事に関わる啓蒙書、呪術書を中心に、その収集を行う。収集したものについて、日中の医書や類書を参考にその整理と分類の方法を考える。それを通して仏教説話および神道説話また世俗説話の世界と対比することによって、その特質についての考察を行う。

(1) 鎌倉末期に編纂された『医家千字文註』の内容について詳細な研究を行う。①現在、本書は『続群書類従』に翻刻があるが、誤りが少なくないので、学術的に正確な本文の提供と、訓読文の確定を行う。②関連する日中の典籍本文の調査と抽出を行う。③収載される医事説話を研究する。④本書の構成と内容を研究する。⑤出典関係を持つ医事書、類書、ないし医学書との関係についての考察を行う。⑥『千字文』享受史上の本書の位置と意義を明らかにする。

(2) 鎌倉時代に編纂された『医談抄』の内容について詳細な研究を行う。①関連する日中の典籍本文の調査と抽出を行う。②収載される医事説話を研究する。③本書の構成と内容を

研究する。④出典関係を持つ医事書、類書、ないし医学書との関係についての考察を行う。

(3) 医事説話の世界では心理・文化的表象としての「虫」が問題となる。日本の古典作品には、古来「虫」の描かれることが諸外国に比べて多いようである。心理・文化的表象としての「虫」について書かれた記述及び絵画資料を収集し、それについての意味論的なアプローチによる研究を行う。

以上を背景に古代・中世の文学・文化に関わる諸文献に現れる医事的な記事に考察を加え、広い視野から中世における医事的教養の特色を明らかにする。

中世の医事的な教養と近世の医事的な教養の比較研究を通して中世における医事的教養の特色を明らかにする。

古典医学における心身一元的な五臓思想が心身二元的な西洋医学思想と出会うことによって生じた摩擦や対立が、具体的にどのようなものであったかを明らかにする。

## 3. 研究の方法

(1) 「虫」に関わる資料を解析する研究会を当科研のメンバーである美濃部・長谷川・辻本の他に、人類学者のペトロ・クネヒト氏に加わってもらい、定期的で開催する。国文学・人類学の知識を動員して資料を収集し、精神医学の知見を導入してそれを分析する。

この研究会の議論の成果を一書として出版する。その編集作業にアルバイトを雇用して、索引の作成、校正などの補助をしてもらう。

(2) 『医家千字文註』、『医談抄』の輪講会を、長谷川・辻本の他に、説話文学研究者である中根千絵氏に加わってもらい、定期的で開催する。本文の整理、出典との比較を厳密に行い、この両書が何をめざしていたのかを考える。

(3) 上記の二研究会において必要な資料を各地蔵書機関に赴いて調査収集する。江戸時代の版本・写本のほか、中世の写本や、中国医書などが含まれる。内藤記念くすり博物館、京都大学附属図書館富士川文庫、武田科学振興財団杏雨書屋、国立公文書館などが対象となる。また、江戸時代の版本や中国で出版された版本、医学史の研究書(活字本)を購入・収集し、研究に使用する。また、訪書に赴くことが困難な箇所資料は、写真などを入手することにより研究に利用する。特に絵画資料の発掘と収集に力を入れる。

(4) 人類学者のペトロ・クネヒト氏に加わってもらい、各地に残る「虫封じ」の行事など、

医事啓蒙書の記載と関わって生まれた可能性のある民俗儀礼を実地に調査する。「虫封じ」は幼児の無事な成長を願う儀礼の一つであるので、幼児の成長に関わる諸儀礼にも目配りする。

(5)『玉葉』『明月記』などの鎌倉時代の貴族の漢文日記から医事に関わる記事を抽出し、当時の貴族達に医事的な知識がどのように浸透していたかを検討し、医事説話が集成された背景を考える。

#### 4. 研究成果

2010年1月に、研究代表者であった美濃部が死去したことは本研究にとって大きな痛手であったが、分担者であった長谷川が代わって代表者となり、研究を遂行した。

本研究においては、二方面において成果を挙げることができたので、二項目に分けて叙述する。

##### (1)「虫」の研究

江戸時代以前には、人間の心身の変調の原因に、「虫」が想定されていた。それは少なからぬ医事啓蒙書にも記され、また「疝の虫」などは呪術的治療の対象ともなった。

本研究費を受け、文献資料の調査・収集、民俗例の調査を重ねた。その成果をもとに、精神医学、国文学、民俗学の知見を持つ研究者による研究会を定期的に行い、議論を深めて調査結果に検討を加えた。その成果は、研究成果欄の「図書」の項に記した『「腹の虫」の研究—日本の心身観をさぐる—』名古屋大学出版会 2012年5月刊)にまとめ、出版することができた。

現在、心因とされる心身の症状は、古くは憑依をはじめとする霊因として捉えられることが多かった。病因として「虫」を想定するあり方は、病気を霊因として考えるのと同様の心身観を濃厚に残している。「鬼」と性格の重なる「尸」というものも想定されており、たとえば「伝尸病」は「鬼」が引き起こすものとされたり、「虫」が引き起こすものとされたりした。このように、病因を「虫」として捉えることは、病因を「鬼」のような霊因として考えるあり方と重なり繋がるものであった。それゆえ、しばしばその形は奇虫、異虫とも言うべき自然界の虫とはかけ離れたものであることがあった。

その一方で、病因として「虫」を想定することは、自然界にいる虫と同様の存在を病因と考えることでもあり、その点では霊因を否定する側面をも持つものであった。霊的なものに対する場合とはちがって、虫に対しては駆虫剤が用意されており、かつての医学モデルの中で退治の方法が明確に存在したのである。病因を「虫」と考えることは、この

ような両義性を持つものである。

病因としての「虫」の持つ複雑さ、多面性はさまざまな言説の中に見出すことができる。たとえば江戸時代における、顕微鏡による異虫の観察例などがその一つである。

虫を病因として考えることは、心身の中樞が五臓であるという五臓思想と密接に関わっていた。それゆえに、「虫」の居所は腹や胸とされた。五臓思想の消長と「虫」の関わりについて、諸資料を駆使しながら考察した。

幕末・明治になると、脳・神経を心身の中樞とする考えが導入されるが、それに対する江戸時代の医家達のさまざまな反応を集成、分析した。明治に入ると五臓思想は医家の間では急速に廃れていくが、さまざまな言い回しや心理表現の中に、それを背景に言い方は根強く残ったのである。

以上のように、中世の医事書の言説の分析からはじまって、日本の心身観を解くキーワードとなる「虫」を中心に、日本の心身観についての学際的な研究を成し遂げることができた。

また、一部は上掲書の内容と重複するが、「虫」が心身の異常を引き起こすというような中世以来の病症観が、近代西洋医学の導入によって、どのように消え、あるいは残ったのかについて検討し、共同で論文を執筆した。明治期の医学書、教科書、文芸作品などにおいて「脳・神経」を心身の中樞とする考えがどのように広がっていったかを検討すると同時に、「腹の虫」に代表される「五臓」を心身の中樞とする考えが、人々の思考や言葉遣いの中に残った様相についても、翻訳文などを通じて検証した。

(2) 鎌倉時代の医事説話集『医家千字文註』『医談抄』については、説話文学研究者の中根千絵氏に加わってもらい、上記の研究会とは別に月例の研究会を開催し、注釈作業を進めた。また、『医家千字文註』については、各地の諸機関に所蔵される写本を閲覧・調査した。

中国の文献との比較や、あるいは編著者自身の漢文読解が充分でないゆえに意が通じにくい所の読解など、困難な点が多く、やや遅れがちではあるが、読解・注釈は着実に進みつつある。『医家千字文註』については、ほぼ訓を確定する作業を終えた。『医談抄』についても出典の搜索などは大体終えており、2012年度中に注釈作業を完成できるよう、準備を整えることができた。この二書の注釈的研究についてはいずれ一書として世に問う予定であるが、出版されれば医事説話研究の萌芽的なものとなり、今後の研究の進展に向けての有意義な叩き台となるであろう。特に『医家千字文註』については、従来、活字本としては若干の誤りを含む『続群書類従』

白文があるだけであるので、学界に大きな貢献が出来ると考えている。

また、この成果を元に分担者辻本は、両書の求めようとしたものがそれぞれ何であったのかについての論文を発表し、それぞれの医事説話集の性格や目的の違いについて明らかにすることができた。

『医談抄』の著書惟宗具俊の関心は、医師の人格や倫理よりも、医師の能力と貴人の治療に当たっての処世に向く。現実の場から離れた空想的な医のあり方ではなく、宮廷医として実際に自分たちがどうあるべきで、どのように振舞うのがよいかを論じている。貴人治療の実践の場に即した形での後進の教導を目的としたものが、『医談抄』なのである。

一方、『医家千字文註』は、医事のための話柄だけを集めたとはいいがたい。一部の章段では、医家の立場から見た世界解析の理論・体系を述べている。医療の現場に役立つ話柄を集めるというよりは、断片の羅列ではあるけれど、医家による世界の全体像を示そうとしたと思われる。すなわち医家の視点から世界の構造を抜き書き風に描き出したものが『医家千字文註』なのである。

両書の基本的な性格は以上のように解析できたので、今後はさらに両書の詳しい分析を多角的に行い、個々の説話の分析や、両書を産んだ時代の、医事を巡る状況を明らかにしたい。

また、九条兼実の『玉葉』や、藤原定家の『明月記』をはじめとする鎌倉時代の漢文日記から、医事に関わる記事を抽出し、『医談抄』や『医家千字文註』の背景となる宮廷医たちの実態について、作品と関わらせながら考察した。

鎌倉時代には、複数の宮廷医が現在でいうチームを組んで貴人の治療に当たることがあり、医家以外の貴族をも交えた評定が行われることがあった。医事説話はそのような場で、他の医家や貴族を説得する手段として使われるという一面があった。

また、治療法をめぐる対立は、宮廷医同士の間ばかりではなく、宮廷医と民間医の間で生じることもあった。宮廷医の優位を啓蒙する意味も『医談抄』にはあったと思われる。

当時の貴族たちは自らも医事的な知識を持っており、彼らに対して宮廷医たちは自らの研鑽ぶりを示す必要があった。そのような必要からも『医談抄』や『医家千字文註』は編まれたと考えられる。

宮廷医たちと、その患者であった貴族たちの関係を見ることができたことは今後の研究に向けての一つの指針となろう。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

[雑誌論文] (計4件)

① 辻本 裕成 『医談抄』と『医家千字文註』—両書のめざしたもの—、南山大学日本文化学科論、査読無、11 巻、2011、pp.1-22

② 長谷川 雅雄、美濃部 重克、ペトロ・クネヒト、辻本 裕成 「虫」観・「虫」像の変遷と近代化—「五臓思想」から「脳・神経」中枢観へ— (下)、アカデミア 人文社会科学編、査読無、90 巻、2010、pp.141-258

③ 辻本 裕成、記録の中の医師達—医事説話集『医談抄』理解のために—、南山大学日本文化学科論集、査読無、10 号、2010、pp.15-35

④ 長谷川 雅雄、美濃部 重克、ペトロ・クネヒト、辻本 裕成、「虫」観・「虫」像の変遷と近代化—「五臓思想」から「脳・神経」中枢観へ— (上)、アカデミア 人文社会科学編、89 巻、査読無、2009、pp.151-215

[図書] (計1件)

① 長谷川 雅雄、辻本 裕成、ペトロ・クネヒト、美濃部 重克 「腹の虫」の研究—日本の心身観をさぐる— (南山大学学術叢書)、2012、pp.479

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

長谷川 雅雄 (HASEGAWA MASAO)

南山大学・人文学部・教授

研究者番号：70148295

(2010年1月～研究期間終了時)

美濃部 重克 (MINOBE SHIGEKATSU)

南山大学・人文学部・教授

研究者番号：90065474

(研究期間開始時～2010年1月)

### (2) 研究分担者

辻本 裕成 (TSUJIMOTO HIROSHIGE)

南山大学・人文学部・教授

研究者番号：90 249920

長谷川 雅雄 (HASEGAWA MASAO)

南山大学・人文学部・教授

研究者番号：70148295

(研究期間開始時～2010年1月)

### (3) 連携研究者

中根 千絵 (NAKANE CHIE)  
愛知県立大学・文学部・准教授  
研究者番号：80326131

(4) 研究協力者

ペトロ クネヒト (PETER KNECHT)